



バラカルド市役所前広場。バスクの経済中心ビルバオ都市圏にある都市。ピカソの壁画で知られるゲルニカにも近い。バスク地方は過去、国民国家の狭間で揺れ動いてきたが、欧州統合を受けて、国の枠を越えて自地域の発展を模索する動きがみられている

写真提供：筆者（以下も同じ）

欧州・国・地域の 三重アイデンティティ

若手建築家による設計コンペの試み

おか べ あ き こ
岡部明子

千葉大学工学部助教授

表と裏 ユーロ硬貨の

ユーロ圏の国々を渡り歩いていると、等価なのに違った絵柄のコインが混ざっていることに気づかされる。なるほど表のデザインは共通なので、1ユーロなら1ユーロと判別がつく。だが、裏を見ると铸造した国によって異なるレリーフを施している。もちろん、裏がドイツ印のコインをイタリアで出しても問題なく使える。

硬貨をひっくり返しながらか眺めていると、表は欧州人、裏は例えばフランス人の顔が浮かんでくる。ユーロ硬貨には、欧州統合と国民国家を両立させる配慮がある。通貨は日々手にするものであるから、市民意識に影響を与えないわけがない。ユーロ圏の市民は、ユーロを介して広く欧州への帰属を意識するようになる一方、伝統的な国民国家への帰属も薄れないのではないだろうか。

私たちは、唯一の国民国家に排他的に所属するものと、知らぬ間に思わされてきた。だが、欧州では、国民でありかつEU市民でもあるという新たな常識が定着しつつある。二重のアイデンティティがこれまでの国民意識を微

妙に相対化する方向に働いている。これが一段スケールダウンして、国民国家と地域の双方に対等に矛盾なく帰属する可能性へと展開していった。

三面相の アイデンティティ

EUを政策科学的に研究しているL・ホーフは、統合の進展によって国民国家より下位の地域（リージョン）が相対的に浮上してくる構図を明らかにしようとしてきた。ホーフは、スペイン北部のバスクとカタルーニャにおけるアイデンティティ意識の変化に注目している。この2地域は国民国家と対峙する地域レベルのナシヨナリズムの強いところである。

複数のアンケート結果を総合したホーフの考察によると、1980年代の自治権拡大のプロセスを経て、地域と国のいずれかに排他的アイデンティティを持っている人の割合が下がり、かわって地域と国の双方にアイデンティティを見出している人が大きく増えている。これはまた、スペインのEC加盟が近づくと期を二にしている。2つのアイデンティティを意識している人が、バスクでは79年と91〜94年と



おかべ あきこ ●建築家。環境学博士。バルセロナの磯崎新アトリエ勤務を経て、スペイン及び日本でインテリアや住宅建築などのデザインを手掛けるとともに、地域戦略やサステナブルシティをテーマに活発な言論活動を展開。2004年より現職。主な著書に『ユーロアーキテクツ』、『サステナブルシティーEUの地域・環境戦略』、『持続可能な都市—欧米の試みから何を学ぶか』（共著）など

では44%から56%に、カタルーニャでは50%から67%に増えている。

バスクは、分離独立を求めるテロ組織ETA（バスク祖国と自由）の活動で知られる。だが、スペインからの独立を望んでいる市民は数%に過ぎない。市民の多くはもつとしたたか、スペイン国民であり続けながら相対的な自立を最大限に強め、特定の課題に限り、国と同等の発言権をEUレベルで主張している。限定的二重国籍の可能性まで見通し、排他的国籍の常識に挑んでいる。

バスクやカタルーニャは、国民国家の狭間で揺れ動いてきた特異な歴史を辿ってきた。そのため、欧州統合の波をとらえて、国の枠を越えて自地域の発展可能性を広げようとする動きが顕在化してきた。これらの地域はどちらかといえば特殊で、欧州には国民国家に守られていたほうが居心地のよい地域も少なくない。とはいえ、EU統合は国民国家を確実に変質させている。欧州の人びとは、一本の軸に群がるようなナショナル・アイデンティティを脱し、欧州と国が表裏一体のユーロ硬貨のような二重アイデンティティに加え、さらには地域アイデンティティを重ねて、三相のアイデンティティを

抱くに至っている。

ユーロパン… 欧州建築家を育てる

現実には、欧州・国・地域の3つをもとに立てることは難しい。EU予算の配分やEU共通政策の決定など個別具体的な課題に直面して、三つ巴のシビアな利害調整が繰り返されてきた。欧州統合は3つのアイデンティティを生かす合おうとして相互に傷つけ合うプロセスでもあった。合意できずに幾度となく欧州統合の危機に遭遇してきた。

欧州・各国・地域（あるいは地方）が対等に関わるしくみづくりが、それぞれの専門分野で試みられている。建築界では、若手建築家の登竜門として定着したユーロパンという設計競技（コンペ）がある。1989年より隔年に開催され、今年で8回目を迎えた。応募者の要件は欧州内の資格を有する40歳以下の建築家である。通常、設計コンペは、特定の敷地に対する計画案を、複数の建築家に競わせ最もすぐれたものを選ぶために行なわれる。ところが、ユーロパンは、欧州全域に各国それぞれ複数の敷地を提示し、全体で複数の入賞案を選ぶ複雑な方式である。

ユーロパンのルーツは、フランスの旧PANにある。PANは、1971年に導入された国内若手建築家を対象とした実施設計競技で、公共事業の設計にデビューする道として制度化された。低所得者向けの集合住宅を中心に据えたプログラムが一般的であった。都市の社会問題を的確にとらえることがまず試された。そして、それを低減する戦略性がローコスト集合住宅に問われた。

欧州共通の 都市社会問題

ユーロパンはフランスPAN思想を受け継ぎ、毎回、欧州都市が一樣に抱える社会問題を共通テーマとして掲げている。共通テーマの設定に汎欧州的な問題意識が表われている。今回は「欧州の都市性（アーバンティ）と戦略的プロジェクト」で、敷地は全74カ所にのぼる。地域あるいは地方が手を挙げて、共通テーマに適用敷地を提供しており、各地域は自らのアイデンティティを敷地選定に託している。建築家は出身国に縛られることなく、欧州とこの敷地にも応募でき、広域競争が担保されている。他方、各国別に審査員グループを組織し、それぞれ国内の複



←↓バラカルドのサッカー場。E・アロヨ設計。第5回ユーロパンで優秀賞を受賞した作品。ユーロパンでは、共通テーマに従って、地域あるいは地方が敷地を提供。建築家は出身国にかかわらず応募でき、広域競争が行なわれている

ユーロパン ウェブページ：
http://www.european-europe.com/e8_gb/home/home.php



数の敷地に対する応募案を一括して審査する。各国単位の審査結果には当然、国の特徴が反映される。

ユーロパンはこうして、欧州・国・地域の3つの異なる価値判断を組み込み、それぞれ国や地域独自の背景を持った建築家たちが、国境を越えて欧州スケールで競争できるシステムをつくりあげてきた。

ふたを開けてみると、受賞者がすべて国内建築家の国もある反面、小国のみならず国外建築家が多数応募している

るところもあり、お国柄がうまく表われている。応募する側の若手建築家の間でもおおむね評判がいい。例えば、第5回ユーロパンで優秀賞を受賞した作品のなかに、バスクの経済中心ビルバオ都市圏の製鉄所跡地に対する地元出身E・アロヨの提案があった。サッカースタジアムを中心とした再開発がすでに実現している。彼は、マドリッドで建築を学んだあと、オランダの設計事務所で働いた経験を持つ。彼にとつて、ユーロパンは、地元で公共的な仕事をするきっかけとなった。

ユーロパンはすぐれたモデルだが、落し穴が隠されている。ユーロパンが欧州レベルで制度化されたのをよいことに、それまで各都市がそれぞれの課題に合わせて、社会福祉住宅を戦略的に位置づけて、若手育成を兼ねて積極的にアイデアを募ってきたしくみを廃止したところが多い。「小さな政府」への移行で、社会福祉住宅自体が民営化され、若手の柔軟な発想に賭けるリスクより、市場メカニズムによるローコストと質の向上の両立を優先させるようになった。社会福祉住宅が建築の伝統となってきたオランダも例外ではない。フランスPANも、ユーロ

パンに発展的に解消した。若手が公正な競争に勝ち、新規参入する機会が欧州レベルのユーロパン一本に絞られる結果を招き、地域の主体的な都市戦略との関係は薄れた。

自由競争という名の EU統治強化

広域に競争原理を導入すると、官から民へ移行してあたかも個人の自由度は高まるように思われがちである。だが、広域化した競争の規範を維持するために、国や地域に比して欧州レベルで官の存在が目立つという事態を招いている。

EUは、市場統合を拡大させていつでも期待したほどに改善しない経済状況にいらだちを募らせ、2000年にリスボン戦略（注：「より多くよりよい雇用とより強い社会的連帯を確保しつつ、持続的な経済発展を達成しうる、世界で競争力があり、かつ力強い知識経済になる」という今後10年間のEUの目標を確定したものを）を示した。以後、欧州委員会の文書には「競争」「競争力」の言葉が目に見えて増え、競争政策を重視するようになった。

ドイツの環境都市として知られるフ

↓〈上〉フランスに近いドイツ南西部の都市カールスルーエのメインストリート。カールスルーエではフライブルクと同様に、LRT（次世代型路面電車システム）を郊外電車と直結させ、脱車社会を目指している

↓〈下〉エストニアのタリン旧市街の広場。EU憲法をアピールする大きな風船がふくらんでいた。EU加盟を果たして間もない中東欧諸国でも、EU憲法草案への関心は高い

ライブルクは、LRT（次世代型路面電車システム）を導入して、歩いて移動できる魅力的な都市を実現してきた。フライブルクをはじめドイツの多くの都市では、自治体の設置した交通会社が都市公共交通を運営しているが、運賃収入だけでは採算が合わず、大半が赤字経営だという。水エネルギー供給を担う兄弟会社の黒字で、都市交通の赤字を伝統的に相殺してきた。そのおかげで安定的に質の高い公共交通を維持できてきたという。

これは、都市環境を都市圏単位で統合的にマネジメントする財政的しくみといえる。しかし、「近い将来、公共部門にも競争を徹底させるEU方針で、ドイツの都市のこの方式を維持できなくなるだろう」と公共交通関係者は一様に嘆いている。EU側には競争によるコストダウンのメリットなど、それなりの言い分もあるが、EU競争政策の強化が、地域の実情に合わせてフレキシブルにつくりあげていたしくみを壊しかけている一例である。

重層するアイデンティティを賢く生かす

数カ月前にオランダとフランスの国



民投票でEU憲法反対が勝り、EU改革は冷や水を浴びせられた。このEU危機を救う期待が、9月ドイツ総選挙に集まったが、当初予想に反してEU改革派を失望させる結果となった。

一般市民の総意が、EU統合の進展にブレーキをかけているのは事実である。とはいえ、彼らのほとんどは、EU統合以前の国民国家体制への帰属を望んでいるのではなく、欧州市民というアイデンティティの広がりを歓迎している。彼らが警戒しているのは、広域競争の自由化と並走してEUレベル

の官が実効力を増し、一市民の行動が国よりもさらに速いEUから間接的に制約されることである。

ユーロ硬貨に、表裏に加え、てもう一面あつたとしたなら、「地域の社会文化的な多様性」が铸抜かれていることである



う。今EUが進めようとしている改革は、一市民にとってみれば、自由競争という偽名で、隠れた3番目の面が汎欧州に铸直されようとしているような感覚かもしれない。

欧州の人びとは、排他的ナショナルリズムによる苦い紛争の歴史と統合までの長く困難なプロセスで多くを学び、賢い市民に育っている。欧州・国・地域の三相をバランスよく維持することが、競争力のある一部の市民を偏重することなく、多くの普通の市民が選択可能性を広げて行動の自由度を最大化できる道であることを体得している。☺